

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成26年8月1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 薬学研究科

職 名・学 年 准 教 授

氏 名 久 米 利 明

助成の種類	平成26年度・研究者交流支援・国際研究集会発表助成／一般		
研究集会名	第17回世界臨床薬理学会議 17th world congress of basic and clinical pharmacology		
発表題目	脳血管疾患に対する薬効評価系構築へ向けた新しいアプローチ New approach for evaluating the drug effect in the carebrovascular disorders		
開催場所	南アフリカ・ケープタウン		
渡航期間	平成 26 年 7月12日 ～ 平成 26 年 7月19日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000 円	
	使用した助成金額	300,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	航空運賃および宿泊費	325,140円
		空港使用料／手配料／出入国諸税等	60,860円
上記費用の一部として300,000円を使用			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

成果の概要／久米 利明

研究集会名：第 17 回世界臨床薬理学会議

開催場所：南アフリカ共和国・ケープタウン

渡航期間：平成 26 年 7 月 12 日～平成 26 年 7 月 19 日

報告者：久米 利明（京都大学 大学院薬学研究科 准教授）

<国際研究集会参加の成果について>

報告者は、京都大学教育研究振興財団が公募した平成 26 年度国際研究集会派遣助成を受け、第 17 回世界臨床薬理学会議に参加したのでここにその成果を報告する。

報告者が参加した国際薬理学会議(IUPHAR World Congresses of Pharmacology)は 4 年に一度開催される薬理学分野における世界規模の学会である。本年の第 17 回大会は国際臨床薬理学会と合同で、世界臨床薬理学会議として開催された。そのため、約 1800 名の基礎および臨床の薬理学研究者が一斉に集い、23 の Plenary Lecture と 400 演題を超える Oral Session を中心に、1,300 を超える演題がポスター形式にて発表された。やはり前回大会がヨーロッパのデンマークで開かれており、その際にも参加をしたが、前回に比べると地理的な不利と治安に対する不安もあるせいか、参加者数の減少は否めなかった。

口頭発表者は北米や欧州、アジア、中南米、オセアニアを始めとする世界中の著名な薬理学研究者が含まれており、発表される研究成果の中には将来的に Nature 誌や Science 誌を始めとする一流の雑誌に掲載され得る画期的なものも多数含まれると予想されていた。実際に本学会に参加し、一流雑誌に掲載が決定しているが、各雑誌のホームページ上でもまだ公表されていない研究に数多く出会うことが出来た。雑誌の発刊よりもかなり早い時期に素晴らしい研究成果に触れられることは薬理学の分野で研究を続けていく上で非常に有用であったと強く確信している。特に、自分の研究テーマとの関連があり、これまでに論文を引用したことのある Salvaor Moncada 氏の講演は大変興味深いものであった。研究分野は違うが一酸化窒素の第一人者の発表を拝聴したことは、今後の自身の研究にも大いに役立つ内容であったと考えている。

今回報告者は、「New approach for evaluating the drug effect in the cerebrovascular disorders」(日本語題名；脳血管疾患に対する薬効評価系構築へ向けた新しいアプローチ)という演題名で口頭発表を行った。今回のセッションは次回の本学会が京都で開催されることが決定しているため、次回ホスト国として日本のプレゼンスを示すためという役割も担っていた。内容の概要としては、脳血管疾患への治療薬の開発が渴望されている現状において、新規の薬効評価系の開発は必須である。報告者らは脳実質細胞と循環系の細胞との相互作用を観察できる新規評価系としてゼブラフィッシュを使用した画期的な系の構築を行ったのでその詳細について発表した。発表日時は 7 月 16 日(水)の午後 3 時半から午後 5 時までのセッションのうちの 3 題目であった。発表後、何人かの参加者より有意義な質問を受け、充実した討論が出来た。セッション終了後にも、質問者とディスカッションを続け、彼らと討論や意見交換を行う貴重な機会を得ることが出来た。同世代の海外の薬理学研究者と直接英語にて会話することで、自身の語学の上達にも大変有効であったと考えている。互いの研究成果を紹介して同じ研究領

域において切磋琢磨する世界中の研究者と直接意見を交わすことができ、また彼らに対して効果的に研究成果の宣伝・意義の強調ができたことから、自らの研究の発展に大きく寄与すると考えられる。

報告者にとって本国際学会に参加し有意義なセッションでディスカッションできたことは、今後の研究生活の方向性の決定に大きな意味を持つものであった。また、次回の本学会が京都で開かれることが決定しており、その際の視察としても非常に意義あるものになった。最後になりましたが、今回の国際会議派遣に対し助成して頂いた京都大学教育研究振興財団に厚く御礼申し上げます。